

# お札ふだに読める民間信仰

——柴又帝釈天をめぐる——

The World of Folk Beliefs: The Taishaku-ten of Shibamata

ジョセフ・キブルツ

Josef KYBURZ

今回の研究フォーラムのタイトルには「人と民具と暮らし」という概念がはいっているので、再び「お札ふだ」の話をしようと思う。おふだは人と暮らしとは密接な関係があることは間違いないと言えるが、“民具”であるかどうかは、即座に言うとはそれほど明晰なことではあるまい。柳田国男監修の『民俗学辞典』に拠ると、「民具」とは“常民（あるいは民衆）の日常生活における諸要求にもとづいてつくられ、長いあいだ使用されてきた道具や器物である”とのことである。道具や器物とは云えないであろうが、日本常民文化研究所の前身であったアチック・ミュージアムの分類では、「信仰・行事に関するもの」の中の「呪具、祈願具」、さもなくば「縁起物」として捉えるならば、おふだは極めて広い意味での民具の範囲には入るであろう。その定義を前提にしながら、ここでは「おふだ」を民具と同じ扱いにしたいと勝手に決めさせていただく。

おふだは一般的に、寺社が発行する神仏の加護があるという木か紙一枚でできている札ふだをいう。通例の道具と違って、おふだは材料が重要ではなく、片側の平らな表面に記号、文字や絵が書いてある。それは、もしも民具として見なせば、おふだの特徴である。結局、「おふだ」の語源は「文板フミイタ」の縮約と言われている。

このことは、おふだの最も重要な点というのが、おふだを作っている材料にあるのではなく、その形にでもなく、またおふだに求められた働きにでもなくて、おふだに書かれた文字にあるということの意味する。おふだが私たちにとって貴重な資料であるのは、その内容、その機能、その歴史、おふだの示す信仰について、多くのことを教えてくれるからである。

ひとつ例をみてみよう。これは、ある民間信仰の全体とその歴史を再現できるだけの、十分な情報を与えてくれる。これから一緒にみていくおふだは、少なくとも関東地方では、現在もなお民間に広く配られていて、よく知られたものである。これは柴又帝釈天のおふだである（図1）。

柴又帝釈天のおふだは、さまざまなタイプの文字をともなった帝釈天の像が、現在のバージョンでは、すべて一枚の紙の上に印刷されている。これはおふだの種類の中なかでは中くらいの大きさで、だいたい高さ12cm、幅は5cm未満しかない。おふだは現在500円



図1 柴又帝釈天のおふだ（現在）  
（11.5×4.5 cm）





図4 鳥取市摩尼寺の帝釈天像



図5 新編武蔵風土記 (1810-1828) の柴又村題經寺の記録

的解釈である不思議なものをかぶっている。開かれた左手は忿怒を表している。

この像は帝釈天の通常の像とは非常に異なっている(図4)。もしここに帝釈天だと記されていないならば、仏教図像学の専門家であっても、これを帝釈天であるとは認めがたいであろう。

この帝釈天についての最も古い記録(図5)は、『新編武蔵風土記稿』の第27巻、「葛飾郡東葛西領柴又村」にあり、次のように伝えている。「帝釋天像 縁起の略に云、當寺に日蓮彫刻せし新祈禱本尊とて、寺寶にありしよし古へより云傳へしが、其在所を知らず、然るに安永八年本堂再建の時棟上より長二尺五寸、幅一尺五寸、厚さ五分許の板出たり、水をもて其煤塵を清めしに、片面は病即消滅の本尊を彫りし、片面には帝釋天の像を刻せり、板の小口は松に似て脇の方は檜に類し、堅く重きこと尋常ならず、これ即ち言傳えし日蓮自刻の寺寶なりとて、一本山に達しかの帝釋天は庚申に因あり、又屋根裏よりで足も庚申の日なれば、其日を縁日とせしより次第に近郷の土人信仰なし、江戸似ても信ずるもの多く、又其像を乞えば板の両面を摺寫して與ふ、今假に本堂に安し、社は未だ造立ならず、其圖次の如し」(図5)。

墓地にある一種の墓石について付け加えておこう。天明3年(1783)の浅間山の大噴火によって、江戸川の土手に多くの犠牲者の死体が流れ着いた。それらの人々や馬などを供養するために建立されたのがこの供養塔なのである。これは天明年間(1781-1789)に続いた悲惨な状況を示す有力なひとつの証拠である。天明年間というのは、5~6年の間に、火災・飢饉・伝染病・地震・そして浅間山の大噴火といった自然災害がたび重なったことで悲しくも有名である。

偶然にも、天明3年の浅間山の大噴火について、ひとりの外国人の証言が残されている(図6)。これは、イサーク・ティチング(1745-1812)という、当時長崎に滞在していた人物によって書かれた本の口絵で、日本の版画をもとに描かれている。長崎には浅間山噴火のニュースは、その十日ほど後に届いた。

お寺に所蔵されている他の資料が語る場所では、題經寺の第9代の住職である日敬上人が、天明年間の度重なる災害によってひどい被害をうけた江戸の人々を救うために、帝釈天の板本尊を背負って江戸まで行ったということである。おそらく彼は、苦しみの底にある人々の熱狂的な崇拜をまえに、この図像を見せたことであろう。また、印刷されて配布された像や版画は多くの奇跡を起



図6 天明三年浅間山大噴火の図。イサーク・ティチング著 *Mémoires et anecdotes sur la dynastie régnante des djougouns, souverains du Japon* (Paris: Nepveu, 1820) の口絵

こしたことであろう。このようにして、柴又帝釈天の信仰は、当時の江戸で流行していた庚申の日に関する信仰と混じり合いながら、江戸の民衆のあいだに少しずつ広がっていったのである。

ではこれらの補足的な情報から、何を理解することができるであろうか。

まず、これは日本でもまれなことであるが、お寺の本尊がそのまま版画を作ることに役立つ「板本尊」である、ということである。この上の資料に記されている縦75 cm、横45 cm、厚さ1.5 cmという大きさは、題經寺の現在の参拝対象である板本尊の縦72.7 cm、横42.4 cm、厚さ3 cmと

いう大きさとほとんど同じである。当時もいまま板本尊は両面に彫刻があり、表面には日蓮宗の教えに沿って、病疫退散の経文に囲まれたお題目が彫られている。そして裏面には帝釈天の像が彫られている。護符のほうは、おおむね、板本尊の両面が同じ一枚の紙の上に上下に組み合わせられて、一枚の版画になっている。

材料や技術的な面の要素からは、さらに他の情報を得ることができる。まず知っておかなければならないことは、おふだは伝統的に版画であり、この帝釈天のような一枚の版木から印刷されるということである。だから、何百と版を重ねて、500から600枚ほど刷られたあかつきには、版木がつぶれて版画の像がよく分らなくなる。だから版元であるお寺は、新しい版木を作らせる。この新しい版木は、多くは基本的に、古い版木の正確な複製である。しかし、さまざまな理由から、バリエーションを持つことになる。この帝釈天に関していえば、駒場の日本民藝館には創設者の柳宗悦自身によって収集された一枚の古い版画が収蔵されている。この大きさは縦142.5 cm、幅49.2 cmなので、間違いなく現在の板本尊と同じ大きさの版木から刷られたものであることが分かる。

ところが、比較的大きな違いがひとつあることに気づく。それは文字の縦の三列である。一列は作者と像の名前で、他の二列は版元であるお寺の名前とその住所である。これらの文字は現在のお

ふだと比べて違う場所に配置されているというだけでなく、第一の列の場所が像の中央にあって、つまり印刷に用いる版木の表と裏の間にまたがってしまっているのである。このことから、この文字の三列が、それぞれ独立した小さな版木で後から刷り加えられたのではないかと、ということが推測できる。一方、現在の版木の裏面には、文字がすべて一緒に組み込まれている。

同じ形態は、私が見つめることができたものなかで最も古い版画にも見られる。これは高さも幅も半分ほどの大きさで、楮紙に刷られた版画である。この例は極めて興味深いものである。というのは、日蓮の花押の左に、「正中山



図7 民俗学研究所編『年中行事図説』「秋田のなまはげ」

八十七世日相」と書かれたもうひとつ他の署名があるからである。日相は寛政11年(1799)9月27日に大本山である中山法華経寺の第87世となり、文化5年(1808)に亡くなる。このことから、この版画は19世紀の初頭に遡ることができる。板本尊の(再)発見からほんの20年ばかり後のことであり、天明時代からちょうど15年ほど後のことである。オリジナルの4分の1ほどの大きさに縮小されているのは、掛け物として飾るために、より便利な大きさの版画を作るという配慮によるものと思われる。この時代、護符の需要が高まり、その結果、版木がたびたび新しくされたに違いない。

ちょうどこの時期に板本尊が「再発見」されたことは、おそらく偶然ではないであろう。同じく、宗祖日蓮の500年遠忌が天明年間のさなかに記念されたことも偶然ではないであろう。そのとき、板本尊の霊験あらたかな効能がとりわけ待ち望まれていたに違いないからである。

描かれた像を帝釈天として認めるのが困難だという問題について明らかにしておこう(図7)。たしかに、帝釈天であるという文字による明白な説明を無視することはできない。だが、仏教図像学からは認められない身振り、身なり、持ち物、そして容貌から考えると、これはむしろ野蛮で恐ろしげな見かけを持った、ある存在に関わりがあるように思える。顔の表情、髭、剣、左手の身振りなどの恐ろしげな見かけは、しばしば恐ろしい外見をもつ神々のように、悪魔や疫病神を退散させるのである。神々は、一年のある時期に共同体の外部から来訪するのだが、その来訪は浄化や魔除けの効果をもっている。この超自然的な存在は、日本の民俗学では「客人神」の名で知られている。髭のはえた人物が右手に持っている剣は「木剣」に似ている。木剣はかつては柳か桃の木の枝で、日蓮宗のいくつかの宗派では「木剣払い」の儀式の中で使われていた。この「木剣払い」はまさに疫病が流行した時に行われたのである。

帝釈天のご利益はこんにち「除疫開運」であり、また「商売繁盛」である。

おふだを民具として分類すると、道具や器物と比べて、文字と絵がおふだにもたらす大きな利点があることが分かる。おふだの文字や絵は、ひとつの民間信仰の内容を理解させてくれるだけではなく、さらに私たちをその歴史のなかに潜り込ませてくれるのである。